

政新会

行政視察報告書

◇大町市

【大町市のこれからのエネルギー資源の活用について】

□令和1年10月28日（月） 13:30~15:30

□大町エネルギー博物館

【視察目的】

原発に関しての意識が高まっている中、これからのエネルギー問題をどのように捉え、どの方向に進んでいくのが良いのか。その判断の指針を得るための視察でした。

【視察内容】

様々なエネルギーの種類、形態、歴史の展示から始まり、その後は、その仕組みについての説明と、順に学べるようになっている。各エネルギーの内容を総合的に理解し、今後のエネルギーについて考えることが出来る内容でした。

【質疑応答】

Q 「大町エネルギー博物館」はどのような経緯で作られてのか。

A. この地域は高瀬ダム、七倉ダム、大町ダムなど沢山の水力発電の為にダムがあり、それらのダムの完成後に、資料館として作られた。

Q 化石燃料によるものと、水力、風力、太陽光などの自然由来の発電があるが、どの発電が一番有効なのか。

A 原発や化石燃料によるもの、再生可能エネルギーなど、それぞれ長短はある。最近ではCO2問題が浮上してきているので、化石燃料による発電は減少していくと思う。

Q 来館者はやはり子どもが多いですか。

A お子様連れの方が多し。子どもに対しての科学学習館として親しまれている。

政新会

行政視察報告書

◇飛騨市

【インバウンドにおける観光取組について】

□令和1年10月29日（火） 13:30～15:00

□飛騨市役所

【視察目的】

日本有数の観光地である飛騨市の観光立国としての取組みを伺い、土浦の観光推進の為の視察でした。

【視察内容】

勿論、景色など素晴らしいが、観光客を集めるためには、この地にあるものを使っての観光資源を作っているとの説明を受ける。飛騨市の特産物や雪の体験など。今までのありがちな景色、歴史などに頼らない施策は日本中どこでも可能であると勉強してきました。

【質疑応答】

Q トマト狩体験ツアーなど、想像できないようなツアーが沢山あるが、誰がどのように考え、実行しているのか。

A. すべて市役所の職員が考えています。とにかくとらわれないこと。実行も主に市役所の職員で行っている。

Q このような大胆な企画を実行することを怖くはなかったか。

A 失敗したら、すぐに止めればいいと思っている。

政新会

行政視察報告書

◇南砺市

【南砺市の人口減少対策について】

□令和1年10月30日（水） 13:00~14:30

□南砺市役所

【視察目的】

移住定住施策「南砺で暮らしません課」の取組について伺ってきました。移住促進の為の課を創設し、移住に特化した施策を執り行っている。土浦市でも、中心市街地活性化に特化した課を創設してはどうだろう、という意見もある中、その取組を勉強してきました。

【視察内容】

市民にも参加してもらい、移住定住施策を主に婚活と組み合わせて行っている。出会いの場を設けたり、情報交換会、お見合い会等を開催している。その後の定住・空家対策、移住体験ツアーと移住定住に進む段階的な施策内容を伺いました。

【質疑応答】

Q 一般的には行政が頭になり市民に対して行っているが、南砺市はいかに住民を巻き込んでいるのか。

A. 市内31地区を2年間かけて2回まわった。行政だけでやることの限界を説明してまわった。そうして少しずつ理解してもらっていった。

Q 区長の困っていることは、たいていの場合、役員のなり手がいないということだが、こうゆう考えをどのように、どのように持っていくのか。

A. 小学校区なので地区の括りではなく、もっと大きな単位。右肩上がり
の時期に作られた組織なので、今の現状に照らして考え直さないと
いけないのかもしれない。

視察報告書

政新会 寺内 充

1. 長野県大町市のこれからのエネルギー資源の活用について

大町市は豊富な水資源に恵まれ、古くは大正時代から電源開発が行われてきた町である。昭和時代には、電力の安定供給を目的とした黒部ダム、高瀬ダム、七倉ダム、また治水や水資源の確保を図る大町ダム等の巨大ダム建設の拠点となり、現在はダムの街として知られているが、これからのエネルギーは、原子力に頼るのではなく、地熱発電など自然に優しい電源開発に力を注ぐべきだと思っている。

2. 岐阜県飛騨市のインバウンドにおける観光取組みについて

飛騨市には年間 100 万人の観光客が訪れている。それは世界資産登録された白川郷があるが宿泊施設が足りていないので、民間と行政が努力して三市一村で協議会を設置し、その中の施策としてイベント民泊を推進して事業化している。また、外国人の方たちのために、ゲストハウスを市役所が郷の中にリホームして貸し出している。それが観光客の誘致に少しずつ繋がって来ている。

3. 富山県南砺市の人口減少対策について

「南砺でくらしません課」の取組みについて。

南砺市では、婚活支援として年に一回お見合い大作戦というイベントを開催して、そこから結婚に結びつけ、移住定住人口を増やしていこうとしている。また、色々な奨励金や居住補助制度など施策を考えて人口減少に歯止めをかけようとしているが、なかなか思うようにはいかないみたいである。

・エネルギー資源の活用について (長野県大町市)

東日本大震災より、八年が経過した現在も原発による災害が未だ暗い影を落としています。

今回の視察は、原発事故をきっかけに改めて日本のエネルギー資源について、考えてみようとの視点からです。

現在日本のエネルギー資源には、原子力、水力、火力、風力、地力熱、そして、太陽熱となっておりますが、今回は、北アルプスの山脈より下る豊富な水の運動エネルギーについて、勉強させて頂きました。

有名な黒部ダムを中心に数多くのダムがあり、北アルプス流域にとって大きな治水の役割を果たしている。ダム群は、水力発電の聖地でもあり、地域住民に豊かな暮らしをもたらしていました。

原子力に頼っている今の日本は、今後各エネルギー資源の均等化や脱原発を進めていくべきだと強く感じた次第です。

吉田博史

・インバウンドにおける観光の取り組みについて (岐阜県飛騨市)

現在、外国人観光客が日本の観光を支えている状況が続く中、飛騨市の観光の取り組みについて視察しました。

年間100万人の観光客が飛騨市を訪れている中で、飛騨市、高山市、白川町、下呂町では観光協議会を結び連携して観光事業に取り組んでいます。以前は、中国や韓国からの観光客が多く見られましたが、最近は欧米からの方が増えていると言う事でした。

一方、外国人宿泊数が好調に推移している中、新しいゲストハウスや一棟貸しの宿が順次整備され、個人旅行の欧米や香港、台湾を中心とする外国人に選ばれるようになった。

個々の宿について、質問をしましたところ、お客様のニーズを的確に捉えている宿とそうでない宿との格差があり、経営能力を高めていかないと格差は増々広がるだろうと考えた次第です。

吉田博史

・人口減少対策について

(富山県南砺市)

各自治体そして日本が、抱えている大きな問題が、この人口減少対策ではないでしょうか？

土浦市でも人口減少対策は、喫緊の課題であると考えています。

南砺市の人口減少対策事業は、婚活支援事業に始まり、定住・空き家対策事業、協働のまちづくり事業と多岐にわたり細分化された課題に対して、真摯に向き合っている素晴らしい事業でした。

特に、結婚や移住によって人口が増えても、もう一つの不安である雇用に対する対策が充実しています。働く場所が有ると言う事は住み続ける為には、重要なポイントになります。結婚、移住、雇用が揃ってこそ人口が維持出来るのでしょうか。

土浦市は、東京圏にあることからストロー現象で人口流出が見られますが、雇用対策（働く場所づくり）が重要だと感じました。

吉田博史

行政視察報告書

新政会 柳澤明

大町市 これからのエネルギー資源の活用について

2011 年東日本大震災以降、原発に対するアレルギーが増々高まっている。

震災以前は電力の 1/3 ほどを原発が担っていたが、現在はゼロに近い状態であり、その不足分は化石燃料を熱源とする火力発電に頼らざるを得ない。一方で、水力発電は一貫して 1 割程度の供給量を担っており、原発がままにならない現在、CO2 を排出しないエネルギー源としてその存在は増々貴重なものとなっている。

今回訪れた「大町エネルギー博物館」は、大町市周辺にある高瀬ダム、七倉ダム、大町ダムの完成後、その資料などを展示し、エネルギーに関する学習施設として運営されている。

我々が普段何気なく使っている電気について、特に子供たちに対する学習施設というのはそれほど多くはなく、いわば稀有な存在だと思うが、開設当初の 6 万人から年々来館者は減少して、最近では年に 1 万人程度まで落ち込んでいるという事である。

資金面での事情からか、施設開設以来 30 数年、主な展示物が殆ど更新されていないという事が入場者減少の大きな理由なのであろうが、その反面手作り感たっぷりの施設には妙に親近感を覚える。

近年は太陽光や風力などが徐々にシェアを伸ばしてきているが、エコ発電というのは自然環境に左右される部分が大きく、その発電効率と相まっていずれも限界があるようだ。将来的には科学技術の進歩により、より安全な発電技術が確保されるものと期待しているが、「のど元過ぎれば熱さを忘れがちな」日本人にとって、基本的に我が国は無資源国であるという事を再認識し、更なる「省エネ」という事を徹底させるためにも、このような学習施設の運営にはもっと力を入れるべきである。

飛騨市 インバウンドにおける観光のとりくみについて

本市において観光基本計画が策定されたのが平成 21 年度、既に 10 年が経過し、本年度からは第二次基本計画が令和 10 年度まで 10 年間の予定でスタートしている。

統計によればこの間の入込客数は微増（平成 29 年度までのデータ）、そのうち外国人の市内宿泊は 3 倍に増加している。とはいっても 100 人が 300 人になったという程度である。

また、本市の観光客を含む入込客数は年間 100 万人と公表されているが、年に一度の花火に訪れる 70 万人を除くと、僅か 30 万人ほどになるうか。

リンリンロードの全線開通や駅ビルへの星野リゾートの参入などにより、今後の来訪者増に期待が膨らむところだが、果たしてどの程度の効果が出るのか注目して行きたい。

私は今回の視察地「飛騨市」については、隣接する高山市と並んで多くの観光客を呼び込める魅力的な観光資源を、それこそ山ほど抱えている一大観光地というイメージを持っていた。

というのも、この町は観光パンフレットで「飛騨高山」と一括りで紹介されることが多く、高山市と同規模の古い町並みが集積しているものと思い込んでいたが、実際には 1/10 程度だろうか。

そんな中でも白壁土蔵の建物はそれこそ 10 軒ほどに過ぎず、2 軒ある造り酒屋を除けば目玉となるような施設も決して見当たらない。

それにもかかわらず、100 万人以上の観光客を集めるポイントはどこにあるのか、興味深く説明を聞かせていただいた。

担当者曰く「観光資源に限界は無い」。従来の施設型・イベント型の観光はそのままにして、体験型に力をいれているということである。

例えば、トマト狩体験ツアーや大根マラソン、鮎釣り体験や雪上のカンジキツアーなど、身の回りにある何気ない事に、ひと手間加えて客を呼ぶ・・・観光とは非日常性の体験であると、これは当たり前のことだが、その地域ならではの体験が外からの人には物珍しく楽しいのだろう。

そしてトマトや大根などの地場産品は、その後も宅配という形で経済効果をもたらしているようだ。

また、インバウンドについては毎年 2 割ほど増加し、去年は 10 万人ほどの宿泊客のうち、1 万人が外国人だったそうである。中でもイスラム教徒が多いせいか、ムスリム礼拝所やハラール対応の飲食店も複数設置し、同時に外国人が好む民泊やゲストハウスにも力を入れているという事である。

白壁土蔵や作り酒屋を除けば、わが土浦でもできそうな話ではないか。

南砺市 人口減少対策について 南砺で暮らしません課の取組について

世界文化遺産「五箇山」を抱える南砺市には、飛騨市と同様に観光対策でお邪魔したかったのだが、ここでは地方都市における共通のテーマである「婚活支援と移住定住対策」について勉強をさせていただいた。

「南砺で暮らしません課」の業務の一つに、「あなたと私を結ぶ赤い糸プロジェクト」というのがある。

平成23年から始まった所謂マリッジサポーター制度というもののだが、「婚活倶楽部なんと」の会員数が524名、「婚活応援団なんとおせっかい」の会員数133名と、人口わずか5万人の小都市にしては参加者が多いことに驚いた。

その成果が123組の成婚という数字になって表れており、既に81人のお子さんが誕生しているという、うれしい話もお聞きした。

近年は独身者が急増している。その理由は様々だろうが、「お節介おばさん」がいなくなったという事も大きな理由の一つだと思う。

出会いの機会が少なくなっていて、気が付いたらいつの間にか適齢期を過ぎていた。面倒になった。両親もいるから身の回りには不自由しないし、経済的にも何とか自立できる。

そんなことから益々「おひとりさま」が増えて少子化に拍車がかかる。そして長寿化により高齢者が増える。人口減少が急加速し将来の福祉・補償が心配になる。

誠に住みにくい日本になっていくののだが、国から地方まで当然様々な対策が施されている。しかし一向にその効果が見えてこないどころか、現在実行されている福祉政策の上に胡坐をかいている人たちの何と多い事か。

話がずれたが、土浦市でも同じような事業を展開している。その成果のほどは定かではないが、基本は未婚率を下げることにある。

もう一つのテーマである「移住定住施策」も定住人口の増加を図っての施策だが、これがうまく機能すれば己の町の人口増に繋がる可能性もある。しかし、小さな器の中にあるパイの奪い合いに過ぎず、大局的には全く効果のない話である。

人口過密都市から地方都市・過疎地へと、うまくそんな流れができれば一時的には成功したように見えるかもしれないが、根本的な人口減少・少子化対策には繋がらないのである。それどころか、過疎と過密に拍車をかけるような結果にしかない場合も考えられ、目の前の一時的な人口増加策よりは、根本的な少子化対策を徹底するしかないだろう。

そういう私自身はどうかといえば、立場上やはり土浦市への流入人口増加を図り、いくつかの提案もしてきた経緯がある。(前言との矛盾には目を瞑りたい)

今後もそんな活動をして行くだろうし、同時に子育て支援という形で少子化対策にも力を入れていきたいと考えている。

行政視察報告書

政新会 今野 貴子

◆長野県 大町市のこれからのエネルギーについて

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故から、原発に対しての反対意見が多く聞かれるようになった。その一方で、温暖化対策として CO2 削減の声も高まってきている。その削減に一番効率的なものは原発である。この重要な問題に対して、原発推進派と原発反対派がそれぞれの立場や思いで主張している。

この相反する事柄に対して、東海発電所を有する茨城県土浦市の市議として、エネルギーを根本から理解し、今後の地球にとって有益な方向はどこなのかを判断する一助とすべく大町エネルギー博物館を訪れた。

博物館に展示されているジオラマを見ると、大町市と周辺地域にいくつものダムが多いかわかる。原発事故から水力発電への存在意義も増して来ている。日本では主に石炭による火力発電から始まり、水力発電、原子力発電、再生可能エネルギー発電へと推移している。それぞれに一長一短がある。茨城県民としての立場、見方ではなく、地球規模での俯瞰した見方が必要な重要な事案であることを再認識した視察でした。

◆岐阜県 飛騨市のインバウンドにおける観光取組みについて

観光客誘致の施策を行っている行政への視察は何度か伺っている。風景を謳っているもの、歴史やまちなみを堪能できるもの、特産物をアピールするもの等、各行政はその特質を利用した施策を行っている。

土浦は霞ヶ浦があり、特産物の蓮根は日本一の収穫量を誇り、りんりんロードも開通し、遠景には霊峰筑波山がある。この利点を生かすためのアイデアを学ぼうと思っていた。ところが内容はそれとは全く違うものであった。

着目点は体験型観光というもので、例えばトマト狩体験ツアー、大根マラソン、雪上でのカンジイキツアーといったものである。上記の体験ツアー名を聞いて、人気が出ると思う人はいるだろうか。それが人気を呼んでいるというのである。発案者は市の職員。思いつき、トマト農家を回り、旅行代理店に営業をかける。トマト狩りという地味なものを人気ツアーに仕立て上げる努力と熱意を感じる。失敗するとは思わなかったのか、との質問にあっさりと「失敗したら止めればいいんです」という潔い返答に目眩を感じた。観光誘致や移住者促進の施策に成功している行政の共通点は、「熱い市民・熱い市職員・熱い市議会議員」がいる事が各地域の視察で学んだことであるが、ここでもそれが実証された事になる。

市民・行政・議員の三位一体が実現できれば、これだけの観光資源を有する土浦は観光立国になることも夢ではないのだろうと思う。まずはそれに向けての行動が重要であると思い起こされる視察でした。

◆富山県 南砺市の人口減少対策について

世界遺産の白川郷・五箇山を有する南砺市。観光客には事欠かないであろう。しかし南砺市でも人口減少の問題を抱えている。

移住定住に特化した課「南砺で暮らしません課」を創設し、特に婚活支援事業を充実させている。「あなたと私を結ぶ赤い糸プロジェクト」を平成 23 年から開始。会員数の多さに驚く。婚活倶楽部の会員数 524 名。女性 235 名・男性 289 名。婚活応援団の会員数 133 名。女性 90 名・男性 43 名。人口約 5 万人の町でこの数である。質疑応答でもこの質問は出ており、市内 31 地区を 2 年かけて 2 回まわったとの事。その熱意が通じた結果なのだろう。やはり熱意に人は共感を覚えるものだと改めて感じる。

31 地区で婚活地域サポート事業に取り組む団体を募集し、おせっ会さんを含め 5 人以上で構成している。市民全員参加の事業の感がある。

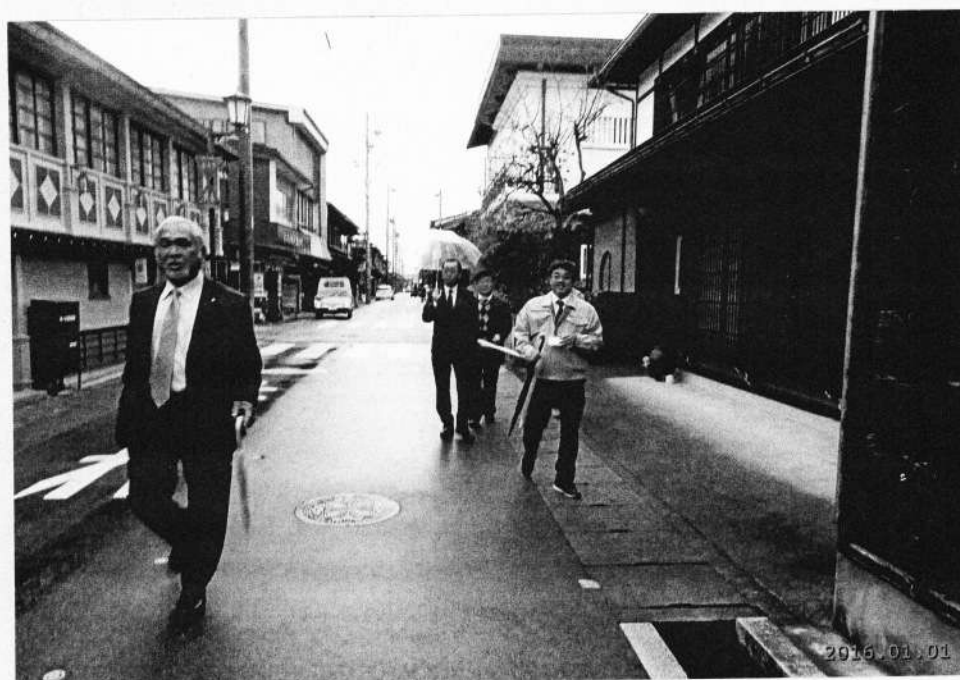
こういった市民と行政の熱意と努力で、2011 年からはじまったこの事業は、2019 年までに、成婚カップルが 123 組というもの凄い数字をあげている。

婚活事業に関しては、支援金や補助金が主な施策内容だが、人の熱意はその効果を上回ることが可能だということを学んだ視察でした。

長野県 大町市



岐阜県飛騨市



富山県 南砺市

